115 學年度第一學期 Eurasia 基金會(from Asia)國際講座

「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次(7)

講題:日本政治與年輕人—在「穩定的政治？」之中

清水唯一朗

(2026.10.29)

摘要

本週邀請到慶應義塾大學綜合政策學部的清水唯一朗教授擔任講師，透過回顧日本與台灣的政治史及社會史，進行了一場探討兩國，特別是年輕世代，對政治與社會運動之認知變遷及其差異的講座。

1．導入

一開始，清水教授向學生們提問：「大家對日本年輕人（青年）有什麼樣的印象？」學生們回答道：「非常會打扮」、「辣妹和不良少年」、「很多人保持距離感」、「多巴胺」等。接著，教授又問：「那台灣年輕人呢？和日本年輕人一樣，還是不一樣？」學生們則回答：「台灣年輕人會表達自己的意見」、「台灣人都很友善、很多人很親切」、「善於社交」等。

清水教授表示，他第一次來到台灣是在 1997 年，當時交流的對象是文化大學的學生。那些學生熱衷於談論政治，和對政治漠不關心的日本年輕人形成鮮明對比，因此讓他十分羨慕。

此外，他在 2015 年 9 月至 2016 年 1 月於政治大學任教期間，親眼見證了太陽花學運，看到年輕人為了社會的未來而發聲、投入公共事務。這段經歷也深深烙印在他的記憶之中。

根據清水教授的看法，近年來日本年輕人的意識逐漸轉向關注與日常生活密切相關的公共議題，也就是對「公共事務」的關心不斷增加。其背景因素包括東日本大震災後志工活動的蓬勃發展、參與反核電運動的人數增加，以及選舉權年齡下修至 18 歲等變化。

2. 台日政治史概觀

接下來，清水教授從 1920 年代開始，概述日本與台灣的政治及社會運動、重要事件的發展脈絡。

1920 年代（約一百年前）當時，日本與台灣的年輕人都積極參與旨在改變社會的政治運動與社會運動。

1945 年戰後第二次世界大戰結束後，日本開始走向民主化；然而，台灣則迎

來艱困且嚴峻的政治局勢。

1960 年代；在日本，學生運動大幅擴展，各地都能聽見抗議與改革的聲音。另一方面，台灣仍處於嚴格的政治管制之下，發出反對與抗議的聲音具有相當大的風險。

1970 年代；日本的學生運動逐漸走向終結，社會運動開始分散至地方議題及各種特定社會課題。台灣則因民族意識與社會意識的提升，興起要求言論自由與地方自治的新一波運動。

1990 年代；日本方面，政黨體系出現重組，自民黨與民主黨之間展開新的政黨競爭；同時，阪神淡路大地震也促使志願服務活動蓬勃發展。台灣則爆發野百合學運，在推動民主化的訴求下，最終於 1996 年舉行首次總統直選。

2010 年代；日本因東日本大震災而帶動志工活動及反核能運動的發展。台灣則穩步邁向民主化，使公民得以公開表達反對與抗議的聲音，社會運動也更加活躍。

3．現況

自 2012 年自民黨重新奪回政權以來，日本歷經長期的安倍政權，直到今日，仍持續由自民黨主導政治。然而，清水教授對此是否能被稱為日本社會與政治的「穩定」提出了質疑。

清水教授引用一項調查結果指出，約有 71%的日本年輕人認為「政治與選舉會影響自己的生活」。對此，他認為，這與其說是對政治的高度信任，不如說是年輕世代對未來生活感到不安的一種反映。

4．發聲的日本年輕世代

清水教授以「日本版氣候青年會議」及「日本青年協議會」為例，說明那些被認為對政治與社會議題「漠不關心」的年輕人，其實正積極學習公共政策，並透過實際行動提出政策建言。

此外，他也指出，這些來自年輕世代的聲音並不僅限於東京等大都市，而是逐漸從地方與各個社區發出，展現出日本青年參與公共事務的新趨勢。

5．台灣年輕人真的「冷漠」嗎？

清水教授提到，2024 年曾聽到一些意見認為台灣年輕人之間正逐漸出現「政治冷感」或「冷漠」的現象。然而，他進一步提出質疑：所謂的「冷漠」，究竟是對什麼事情感到冷漠？如果忽視當時的情境與社會背景，是否能夠僅用「冷漠」一詞來概括年輕人的態度？

清水教授指出，過去台灣社會的政治討論多半圍繞著台灣與中國大陸之間的二元對立等「大政治」議題展開；但在當前社會中，年輕人或許已將更多關注轉向與自身生活息息相關的切身問題。因此，他向學生們提出思考：台灣年輕人是否並非對政治失去興趣，而是將關心的焦點從宏大的政治議題轉移到更貼近日常生活的公共事務之上。

最後，清水教授再次回到講座一開始所提出的「日本年輕人的形象」這個主題，並向學生們提問：經過今天的講座之後，大家對日本年輕人的印象是否有所改變？

中文翻訳
CHATGTP
中文修正
陳順益

115 學年度第一學期 Eurasia 基金會(from Asia)國際講座
「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次(7)
講題: 日本の政治と若者—安定する政治？のなかで
清水唯一朗
(2026.10.29)

要旨

今週は慶応義塾大学総合政策学部の清水唯一朗教授を講師に招き、日本と台湾の政治史社会史をたどりながら、両国の特に若者の政治的社会的運動に対する意識の変遷、差異をめぐる講義が行われた。

1. 導入

最初に清水講師は、学生たちに「日本の若者（青年）にどのようなイメージを持っているか？」と尋ねた。学生たちからは、「とてもおしゃれ」「ギャルとかヤンキー」「距離感がある人が多い」「ドパミン」などの回答があった。続けて、「台湾の若者はどうか？日本の若者と同じか、違うか？」との問いに、「台湾の若者は自分の意見を言う」「台湾は皆フレンドリー、優しい人が多い」「社交的」と回答があった。

清水講師は、初めて台湾へ来たのは 1997 年で、交流したのは文化大学の学生たちだったと述べた。彼らが政治について熱心に語り、政治に無関心な日本の若者とは対照的だったので、清水講師は羨ましく思ったという。2015 年 9 月から 2016 年 1 月まで政治大学で教えた時期には、ひまわり学生運動を目撃し、若者が社会の未来をめぐり、声をあげる様子を見た。それも清水講師の記憶に強く残ったことだった。

清水講師の見解では、近年の日本の若者は、生活に密な問題に関わる「公共への関心」へと意識を向けるようになったという。その背景には、東日本大震災以降のボランティア活動の盛り上がり、反原発運動への参加、選挙権年齢が 18 歳に引き下げられたこと等があると指摘する。

2. 日台政治史概観

次に清水講師は、日台の政治的社会的運動・事件を 1920 年代から概観した。

100 年前の 1920 年代、日台の若者はどちらも社会を変えるための（政治的）運動に関わっていた。

1945 年に戦争が終わると、日本は民主化へ歩み始めたが、台湾には政治的に過酷な国内情勢がやって来た。

60 年代；日本では学生運動が大きく広がり、抗議の声が聞こえる状況にあった。他方、台湾では引き続き厳しい統制下にあり、抵抗の声を上げるには危険だった。

70 年代；日本の学生運動は終焉し、地域や個別課題に活動は分散していった。台湾では、民族意識と社会意識の高まりから、言論、自治を求める新たな運動が起きてきた。

90 年代；自民党から民主党へ政界再編が起き、また阪神淡路大震災を機にボランティア活動が盛んになる。台湾では野百合学生運動の勃興、民主化要求

を経て、1996 年に初の総統直接選挙が実施された。
2010 年代；東日本大震災を契機にボランティア活動、反原発運動が高まった。台湾は着実に民主化へ歩み、抵抗抗議の声があげられる状況になった。

3. 現在の状況

日本は 2012 年の自民党政権奪還以後、長期にわたる安倍政権、今日の高市政権まで自民党による政治が続いている。しかし、これを日本社会・政治の「安定」といえるのか、と清水講師は疑問視する。清水講師は、日本の若者の約 71 パーセントが「政治や選挙が自分の生活に影響する」と答えた調査結果を取り上げ、むしろ将来の生活への不安の現われではないかと考察する。

4. 声を上げる日本の若者

清水講師は日本版気候若者会議と日本若者協議会を事例に取り上げ、「無関心」と思われた若者が政策を学び、実際に提言する取り組みを行っていることを語った。さらに、そうした声が地方や地域から上がっているという。

5. 台湾の若者は本当に「無関心」か

清水講師は 2024 年に台湾では若者の「無関心」が広がっているという意見を聞いた。しかし、「無関心」とは何に対してなのか、その際の場面や背景を無視して、一言で片づけられるのか。かつては台湾と大陸の二項対立をめぐる「大きな政治」が議論の主だったが、現在は身近な問題へより関心が強まっているのではないか、と清水講師は問いかける。

最後に清水講師は、講義の最初に提起した「日本の若者のイメージ」についてあらためて取り上げ、その印象が変わったかどうかと学生たちに問うた。

日本語整理
塚本善也